被災住宅の復旧 建築士がアドバイス

洗浄、消毒、乾燥の徹底を

土壁は再利用へ保存して

西日本豪雨では多くの家屋が浸水被害に遭った。被災地では、汚泥の撤去や災害ごみの片付けが進み、住宅の復旧が本格化する。被災地や避難所で復旧の相談活動に取り組む建築士中村陽二さん（倉敷市中央）は、床下や柱、壁の洗浄、消毒、乾燥の徹底をポイントに挙げる。さらに伝統的な日本家屋の土壁は「汚泥と混じっていなければ再利用できる。捨てずに保存して」と呼び掛ける。

中村さんは10～16日、被災地に足を運び、浸水住宅の状況を確認。2014年に水害で400戸以上が浸水した徳島県などの建築士と連絡を取りながら、住宅の復旧対策をまとめた。17日夜には岡山県建築士会倉敷支部の建築士ら十数人が集まり、被災地の写真を元に、対応の勉強会も開いて情報を共有。近く相談会も開催する予定。


被災住宅の復旧に向け、「浸水部分の洗浄、消毒、乾燥を徹底して」と呼び掛ける建築士の中村さん＝17日夜、倉敷市

洗浄

浸水で使えなくなった家具や家電製品、汚泥を家の外に出した後、屋内の洗浄に取りかかる。

掃除と同じで「上から下へ」が基本。2階が水につかっていれば、2階から行う。浸水した天井、壁、床を水で洗い流す。「電気、水道が復旧していれば、車の洗車などに使う高圧洗浄機が非常に便利」と中村さん。

最後は床下。汚泥を取り除いても、細かな泥や汚れは残っている。次の段階の消毒は、汚れを取り除いているほど効果は上がるので、丁寧に行いたい。


浸水した自宅の修復に取り組む被災者。床はとりはずし、しっかり乾燥させるのが大切だ＝18日、倉敷市真備町川辺

消毒

床や壁、家具などの消毒には塩化ベンザルコニウム（逆性せっけん）や次亜塩素酸ナトリウム（塩素系漂白剤）などを使う。容器の表示通りに水で薄め、消毒液を布にしみ込ませて拭いたり、噴霧したりする。布は軽く絞る程度で、たっぷり消毒液をしみ込ませる。噴霧の時はうっすらぬれる程度に吹き付け、そのまま乾かす。

壁のクロスやボードの奥にある断熱材は水分を吸収しやすく、乾燥しにくいため「再利用は難しい」（中村さん）。断熱材は除去し、この後、消毒液を吹き付けると、カビの発生を抑制しやすいという。

床下の消毒は、床上・床下浸水にかかわらず、床材をはがして行うほうが、後々の乾燥のことを考えるとよい。

庭、道路など屋外の消毒には、消石灰が有効とされており、周囲に飛散させないためと、殺菌効果を高めるために、地面を水で少し湿らせてからまく。強いアルカリ性なので、人の粘膜や皮膚に付いたり、吸い込んだりすると危険なため、屋内では使用を控える。

浸水家屋の多かった倉敷市、高梁市、矢掛町では消石灰や消毒液を被災世帯に無料で配布している。ホームセンターなどでは売り切れのところも多く、活用すれば大きな助けになりそうだ。

洗浄、消毒作業とも、保護眼鏡、マスク、ゴム手袋などで皮膚への付着を避ける。また塩素系漂白剤と酸性タイプの洗剤を混ぜると有害な物質が発生する恐れがあるため、管理に細心の注意を払いたい。

乾燥

洗浄、消毒を終えたら、建材にカビが生えたり、腐ったりするのを防ぐため、しっかり乾燥させる。水分を含んだ断熱材などを除去し、なるべく風通しを良くするとともに、扇風機などで風を送ると乾きが早い。

木材は表面が乾いたように見えても、内部まで完全に水分が抜けるには時間がかかる。中村さんは「夏場だから冬に比べて乾燥は早いものの、1カ月以上はかかるのでは」と話す。

ここを中途半端にしてリフォームを急ぐと、内部結露によって、数カ月から1年以上経過して、カビが発生したり、木材の腐れ、金具のさびが発生することもある。焦らず、慎重に進めたい。

土壁

伝統的な日本建築の土壁は、浸水で崩れ落ちた場合、汚泥などとともに捨てているケースが多いが、まだ残っている場合、中村さんは「土のう袋に入れたり、ビニールシートの上に置いたりして、できる限り保存して」と呼び掛ける。

古い土は多くのバクテリアを含んでおり、新しい土と混ぜることで発酵が早くなる。原料の土を採取できる場所が少なくなっており、新たに入手するのが困難な事情もある。竹などで組んだ土壁の骨組みにあたる小舞（こまい）とともに、残しておけば、再利用できる可能性が高い。